

## 介護支援専門員の認知症のアセスメントの視点の変化について

「私の（心の言葉）ノート」試用後のアンケートから見えたアセスメントの課題について

永松 京子 1) 米澤 麻子 2) 白木 裕子 1) 稲富 武志 1) 加賀美 由旗 1)  
末次 香代子 1) 松野 伊津枝 1)

1) NPO法人ケアマネット 2 1 2) 株式会社NTTデータ経営研究所

### 【要旨】

平成24年度厚生労働省モデル事業「在宅医療連携拠点事業」において歯科医師・家族の会・MSW・ケアマネジャー等他職種にて認知症連携パスの開発をおこなった。連携パスは3つステージにより構成した。今回はパスのファーストステージである、本人のそれまでの人生や思いを大切にしたい支援を受けるために「私の（心の言葉）ノート」（認知症の連携パス）を介護側の視点から作成した。本研究はこのノートを介護支援専門員が試行した後、認知症のアセスメントの視点の変化についてアンケート調査を実施87%が「認知症のアセスメントに対する意識に変化があった」その理由は、本人の意向、価値観、生活の重要性の認識が深まった。介護支援専門員のアセスメントの視点の変化について考察したことを報告する。

### I 研究目的

「私の（心の言葉）ノート」は、本人の生き方、価値観、思いを大切にしたい支援を受けるために、介護側の視点から作成したものである。このノートの試用において、認知症のアセスメントの視点の変化について考察する。

### II 研究方法

1・対象：A市において「私の（心の言葉）ノート」を試用した31名の介護支援専門員  
倫理的配慮としては、対象者に研究の趣旨、個人情報取扱について説明し同意を得た。

2・研究方法：アンケート調査

アンケート項目：基本属性、試用後のアセスメントに対する意識変化と変化の理由、認知症で困難だと思うアセスメント項目、試行後重視するようになったアセスメント項目、アセスメントで連携を重視する箇所、アセスメント時気を付けていること、工夫していること（自由記載）の6項目である。

3・研究期間：平成24年12月26日～平成25年2月8日

### III 研究結果

実務経験10年以上が48%、基本職種は福祉系58%、医療系35%。試行後のアセスメントに対する意識変化は、変わった26%、一部変わった61%で、87%に意識変化がみられた。変化した理由については、本人の意向、価値観を重視するようになった。本人を理解し関わるのが大切。生活歴は重要等であった。アセスメントで困難と思う項目（上位5つ選択）は本人の意向64%、本人の認知症への理解51%、本人の生き方、価値観48%の順であった。試行後に重視するようになった項目（上位5つ選択）は、本人の意向58%、本人の生き方、価値観55%、生活歴48%、本人のつながり35%の順であり、入

退院時等環境変化時の本人の状態13%、健康状態の観察6%、服薬管理6%であった。アセスメントで困難と思う項目と上位2項目は一致し、困難だが、重視すべき項目であることが認識できたことを示している。

アセスメントする際、連携を重視する箇所は、家族35%、かかりつけ医22%、医療サービス13%、地域10%の順であった。基本職種が医療系は、かかりつけ医をはじめとする医療系サービスとの連携が1位、福祉系は、家族が1位であった。

アセスメントで気を付けていること、工夫していることは「本人の思いを聴くようにしている」「より多くの関係者から情報をとるようにしている」等、アセスメントと連携を重視している意見が大多数であった。

### IV 考察及び結論

ノートの試行を通じて、本人の意向、価値観、生活歴等、本人を中心としたアセスメントの視点が重要であることが再確認できた。

認知症を発症してからでは、本人の意向等を確認することは困難であり、お元気うちに、本人の思い、生き方、価値観等をアセスメントしておくことが重要と考える。

試用期間が1か月と短期間だったために、健康管理の場面、入退院時の連携の場面での試用ができず、健康管理、環境変化時のアセスメントの視点の変容には至らなかった。

地域包括ケアシステムを構築していくには、健康面にとどまらず、本人の生き方、価値観を重視したアセスメントの視点が重要と考える。